

英米文学科同窓会 公開講座

シャーロック・ホームズ物語再考 —130年に渡る人気を探る

講師 日暮雅通氏（英米文藝翻訳家）

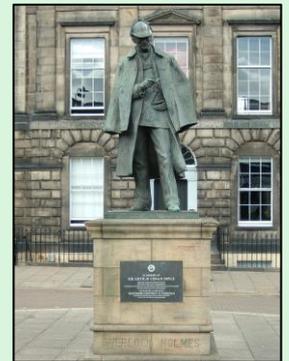


1954年生まれ。青山学院大学理工学部物理学科卒業。在学中よりミステリの翻訳を開始。海外著作権エージェント、出版社編集者を経て独立。現在は英米文芸、テクノロジー、児童書の各分野でフィクション／ノンフィクション両方の翻訳を行うほか、ミステリ・SF分野での執筆もあり。著書『シャーロック・ホームズ・バイブル』（早川書房）で、第76回日本推理作家協会賞（評論・研究部門）を受賞。日本推理作家協会、日本文藝家協会、日本SF作家クラブ、日本シャーロック・ホームズ・クラブ会員。訳書はドイル『新訳シャーロック・ホームズ全集』（光文社文庫）、ヴァン・ダイン『僧正殺人事件』（創元推理文庫）、レイ・ブラッドベリ『黄泉からの旅人』（文藝春秋社）など約200冊。

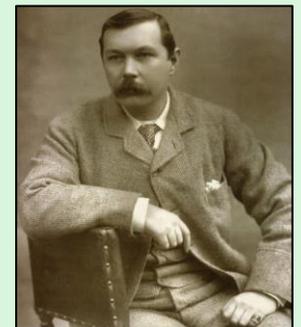
エドガー・アラン・ポーが1841年の「モルグ街の殺人」で生み出したとされる近代的探偵小説。その後チャールズ・ディケンズやウィルキー・コリンズ、フランスのエミール・ガボリオ、アメリカのアンナ・キャサリン・グリーンなどが1850～70年代に刑事を主人公とした小説を発表したあと、1880年代になってシャーロック・ホームズが登場しました。ただ、探偵小説というジャンルが確立されたのは、20世紀に入ってからであり、1910～30年代に続々とあらわれた“名探偵もの”により、その黄金期を迎えたと言われます。

しかし、世界中にその名が知られ、名探偵の代名詞とまで言われるのは、黄金期の探偵たちではなく、黎明期にあらわれたシャーロック・ホームズです。ホームズ物語は、現在の“パズラー”（謎解き小説）に比べると、論理の厳密性や手がかりに関する公平性などに欠ける古典的作品ですが、その後のあらゆるミステリ小説、ミステリ作家たちに影響を与えてきました。

そのホームズ物語は、どのような背景で生まれ、なぜ世界中で130年以上も人気を持続してきたのでしょうか？拙著『シャーロック・ホームズ・バイブル』で試みた「ホームズ物語の誕生および長寿の要因と功労者たち」の分析を参考にしつつ、英米探偵小説の歴史から、19世紀末イギリスの時代背景、作者コナン・ドイルの人生とホームズ物語の関係、人気の持続に貢献した二次的作品や研究者／ファンたちの世界までを、再考・解説します。（講師）



ホームズ像（エディンバラ）



コナン・ドイルの写真（1893）

日時：2024年9月16日（月・祝）13:00～14:30

会場：第19会議室（総研ビル11階）

参加費：300 イーゴ pay（事前申込不要）

予め「イーゴ pay」のダウンロードをお願いいたします。

問合せ先：英米文学科同窓会

E-mail：aogaku.eibun.alumni2020@gmail.com

FAX：03-3409-8975（同窓祭事務局内）



イーゴ pay 登録

同窓祭ホームページ →



英米文学科同窓会
ホームページ →

